

京城帝国大学「哲学、哲学史」講座の日本人たち ——その構成員と制度上の特徴——

Students who Studied at the Philosophy Department of the Imperial
University of Colonial Korea=Keijo Imperial University

許 智香*

はじめに

筆者はこれまで、日本において「哲学」という学問がいかに定着したかという問題についていくつかの角度から掘り下げてきた¹⁾。「世界や人生の究極の根本原理」、「普遍性」を定義の核心とするものが²⁾、なぜ、ここまで西洋中心になっているのか、という問いが一つ目としてあった。「哲学」という言葉だけで西洋由来の学問制度を普遍的なものとして表してきたことは、たとえば、「哲学史」や「認識論」「論理学」「倫理学」などの下位分野がそのまま西洋の学説史で論じられる一方で、「東洋哲学」分野では、「哲学」そのものや下位分野名称に「インド」や「中国」などの地域名が必ず付けられることから明らかである。これについては以前、酒井直樹が諸人文科学の奇妙な不均等性について指摘した通りである。すなわち、明治以来日本では、「西洋という仮想の統一体」のもと、「西洋とその残余」という図式で諸人文科学が定着したのであり³⁾、それを最も代表する学問として彼は哲学を例に挙げた。また、この図式がそのまま朝鮮半島に移植され、今日の韓国の学問制度を維持している、というのが二つ目の問いとしてあった。

朝鮮近代の歴史過程における哲学制度の定着については、それが「京城帝

* 衣笠総合研究機構助教

国大学（以下、「京城帝大」と略称する。）という「内地」の帝国大学の一つの機構として現実可能なものとなったのであり、したがって、帝国大学史における哲学科の形成史を解明する作業は、京城帝大における哲学制度史の解明において必須不可欠な問題となる。そして、植民地の帝国大学に、なぜ「内地」のそれと酷似した形の哲学科が必要だったのかを問うことは、日本の哲学学制史、とりわけ帝国大学史における哲学学制史の問題として、重要である⁴⁾。とくに尹健次が強調しているように、「朝鮮は儒教の国」であった⁵⁾。京城帝大が設立され、哲学科ができたのは1926年のことだが、この時点ですでに朝鮮半島に対する外勢の侵略が本格化した1860年代から半世紀が過ぎていた。それでも李朝封建体制の理念として朱子学が知識人の思想界を支配していた500年の歳月に比べると遙かに短い。ここまで短期間で朝鮮半島の思想界をひっくり返ることができた、哲学制度とはいかなるものだったのか。

本稿では、以上の問題意識に基づき、植民地朝鮮の帝国大学において西洋哲学とはいかなるものだったのかを考える一つの手がかりとして、「哲学、哲学史」講座の日本人たちに注目する。ここで「哲学、哲学史」の教員と日本人学生⁶⁾に注目するのには、二つの理由がある⁷⁾。第一に、西洋哲学専攻者という特性のゆえに植民地の帝国大学の設立趣旨⁸⁾と自分の学問的なスタンスを一致させることが困難だった「内地」の研究者について考えるためである。第二に、他の専攻と違って朝鮮人の比率が格段に高かったのが哲学科のなかでも「哲学、哲学史」専攻であったが、そのなかで、西洋哲学を専攻した日本人学生の経歴を把握するためである。詳細については本文で述べることとし、まず、京城帝大の哲学科という制度の特殊性について簡単に説明した上で、詳細な講義題目および講座担当教員について概観する。その後、「哲学、哲学史」を専攻した日本人学生のリストを哲学科全体の学生より取り上げ、できる限り彼らの前後経歴を明らかにする。

1章 京城帝国大学「哲学科」の制度上の特色と今日へのつながり

まず、京城帝大の哲学科という制度である。京城帝大は、植民地朝鮮において医学部と法文学部の二学部として1926年にできた、帝国大学史上6番目の帝国大学であった。周知の通り、当時の帝国大学は講座制であった。1893年に帝国大学に講座制が採用されて以来、京城帝大の法文学部にも「内地」と同様、講座の種類および数が議論の中心となり⁹⁾、結果的に哲学科には「哲学、哲学史」「支那哲学」「倫理学」「心理学」「宗教学、宗教史」「美学、美学史」「教育学」「社会学¹⁰⁾」¹¹⁾全8種類の講座が設置される。各講座数は初年度より1928年度まで順次増設され、最終的に哲学科には全13個の講座が1943年に「文学科」に統合されるまで存続した。

京城帝大の場合、講座制の下で「哲学科」といわれたのには背景がある。1926年京城帝大設立当時、哲学関連講座が設置されていた「内地」の帝国大学の学科および講座編成の様子を全体的にみると、「哲学科」という学科規定が必ずあったわけではない。理念上ではあるものの、「固定している学部ではない新構想」を目指した「法文学部」という体制をとった東北帝大と九州帝大は¹²⁾、両方とも学科に関する規定がなかった¹³⁾。すなわち、同じ「法文学部」の体制をとりながら「法律学科」「政治学科」「哲学科」「史学科」「文学科」と区分された学科編成のもとで授業科目と講座類が結束力を持っていた帝大は、植民地朝鮮の京城帝大しかなかったのである。京城帝大の場合、原則的に予科¹⁴⁾入学の段階で法学系に進む生徒と文学系に進む生徒が分けられ、まず、「予科修了前ニ其ノ志望学科ヲ申出テ学部長ノ認可ヲ受」けるように、そして、本科一学年が終わる際にはその「専攻学科目ヲ定メ」るようにした¹⁵⁾。京城帝大の法文学部を卒業した学生の学籍簿には「学科」名の次に「専攻」名が記載された。ちなみに1926年当時、京城帝大のような学科規定をもった帝大に東京帝大と京都帝大があったのであり、前者は、講座類に沿って学科も哲学科、支那哲学科、倫理学科などに分類された形¹⁶⁾、

後者は、京城帝大のような「史・文・哲」の三科編成をとっていた¹⁷⁾。

京城帝大の哲学科にみられる以上のような特徴のゆえに、「哲学科」といっても各専攻によってその性質は様々であった。周知のように、京城帝大の「哲学科」に設置されていた諸専攻が、解放後の朝鮮半島においてさらに紆余曲折を経たのちに¹⁸⁾、ソウル大学の「文理科大学」¹⁹⁾における「宗教学科」「社会学科」「教育学科」「心理学科」などの諸関連学科に独立していった。本稿と関連して解放後の「哲学科」²⁰⁾という際にそれは、京城帝大時代の「哲学、哲学史」専攻と、「倫理学」専攻、そして「社会学、宗教学研究室」が主導していた「仏教、印度哲学」方面の研究²¹⁾、「支那哲学」がカリキュラムの大枠をなすようになった。そして、「哲学科」という学科名称とカリキュラムの基本枠は今日まで存続され、2023年現在、全国の31個²²⁾の大学に受け継がれている。

本稿と関連して「哲学、哲学史」専攻だけが当時より「純哲」「哲学専攻」「純哲学専攻」とも呼ばれたのであり²³⁾、実際に学生たちは、専攻関連図書が備蓄されていた「哲学研究室」を中心に学業をおこなっていたと思われる。ここで簡単に京城帝大の「研究室」という単位についておさえておく。

学科と専攻を超えて、教授と学生を併せた京城帝大の実質的な研究組織は「研究室」であった(表1)。『教務例規集』によれば、「研究室」と称するものは「学部教授会ニ於テ承認シタル公的性質ヲ有スル研究室ヲ謂」い、主に研究室で共有する専門「図書ノ備付」がその目的であった。「研究室ヲ有セサル教官」より学生まで、必要な図書の入手を主任教授に依頼し、主任は図書館長と学部長に図書の申請をする。そして、7月21日から8月31日を除く(この期間は正午まで)期間、そして閉館日以外であれば毎日午前10時から午後4時まで、図書の閲覧を希望する人に応ずる義務があるとされた²⁴⁾。(表1)のなか、「哲学研究室」に所蔵されていた専門書物に関してその詳細は不明であるが、「哲学における重要な図書は殆んど網羅している。定期刊行物のバックナムバを合せて一千三四百もあらうか」と、断片的な紹介

が伝わり、「入室者はあまりに少な」く、「専攻生の利用はイデーン²⁵⁾の英訳位」だったという²⁶⁾。

(表 1) 京城帝国大学法文学部哲学科関連研究室現況

名称	主任教授	設立年月日
心理学研究室	黒田亮	1929.2.20.
美学、考古学研究室	田中梅吉	1929.2.20.
哲学研究室	田邊重三	1930.10.8.
支那哲文学研究室	辛島驥	1931.5.13.
倫理、教育研究室	田花為雄	1932.3.10.
社会学、宗教学研究室	秋葉隆	1932.3.10.

2 章 「哲学、哲学史」講座において開設されている題目の詳細

それでは、本科の2学年から「哲学、哲学史」を専攻に進んだ学生たちは、授業の面においていかなる制度的規制を受けていたのか。当時の哲学科の履修科目と単位数については、京城帝大庶務課で毎年発行した『京城帝国大学一覽（以下、『一覽』と略称する）』の法文学部規定にその大枠が載っている。1926年4月に朝鮮総督府認可で出された法文学部規定は、その後何度も部分改定や全文改定を経ているため、授業に関する規定もそのつど変わった。なかでも1931年度の専攻別学修科目は、初年度の1926年度の規定内容をもとに科目名を具体的に挙げているので参考になる。たとえば、「哲学、哲学史」専攻では（括弧の数字は単位数）、卒業までに「哲学概論（1）」「西洋哲学史概説（2）」「論理学認識論（1）」「哲学演習（3）」「哲学特殊講義（2）」、「哲学科ニ属スル科目中別ニ定ムルモノ、希臘語及羅蘭語ノ中（8）」、「史学科、文学科及法学科ニ属スル科目ノ中（2）」を履修するように定めていた。この内容を、「哲学、哲学史」専攻の1929年度卒業生、金桂淑²⁷⁾の学籍簿からみてる（表2）。

(表2) 1929年度「哲学、哲学史」専攻卒業生金桂淑の学籍簿

(注①) 専攻科目	専攻外哲学科科目	哲学科外科目	※備考
哲学概論	倫理学概論	経済学	(注①) 学籍簿の履修科目は2段の表にうめられており、合格月日と科目、成績単位が記載されている。ここでは科目名のみ上段右から左、下段右から左の順でそれぞれ「専攻」「専攻外哲学科」「哲学科外」科目、「外国語」に分類し紹介する。 (注②) 履修科目が記載されている紙面の左端が折れて判明できない部分と、字の解説ができないところを■にした。 (注③) 「外国語学修課程」は別途章を設けて「英吉利語、独逸語、仏蘭西語ノ三種トス」…「学修期間ヲ前期後期ニ分チ各一学年トス」などと定めている。
哲学演習	カントの倫理学的思想	政治史	
哲学演習	心理学概論	法理学講読演習	
哲学特殊講義	心理学演習	外国語 (注③)	
認識論	(黒田) 心理学演習	英語	
哲学史概説	支那唐代詩経講義	英語	
哲学演習 (安倍、田邊)	教育学概論	独逸語	
哲学演習(宮本)	支那倫理学概論	独逸語	
西洋哲学■ (注②)	教育学演習	仏蘭西語	
	社会学演習	仏蘭西語	
	社会学概論	■■語	
	宗教学講読	独逸語	
	宗教学特殊講義	英語後期	
	支那哲学史概説		

紙の左端が折れて判明できない部分もあるが、専攻科目では第一講座の安倍能成と第二講座の宮本和吉、そして1929年度当時、助教授の田邊重三の演習を聞いていたことが目につく(講座担任については次節で論じる)。しかし、『一覽』に載っている履修科目以上に、毎年いかなるテーマで講座が開設されていたかがやはり気になる。たとえば、史学科や文学科の一部の専攻の場合、独自の会報を出していたので²⁸⁾、該当年度の「講義題目」が伝わる。しかし、哲学科に関しては、心理学研究室の『京城心理学会報』と、倫理、教育研究室の『京城帝国大学教育学会会報』のほか、「哲学、哲学史」専攻では学会誌のようなものを刊行した痕跡がない。したがって「哲学、哲学史」講座で実際に教授された講義内容を知るためには、当時刊行された関連

雑誌の彙報などの断片的な記録をたどるしかない。幸いにいくつかの資料に当時の記録が残されているので、その内容を（表3）にまとめた。

（表3）「哲学、哲学史」講座開設題目

年度	概論および概説	演習 講座担当：題名	特殊講義
1926	安倍：哲学概論	安倍：哲学演習	
1927	不明	不明	不明
1928	①安倍：西洋哲学史概説 [4/1] ②宮本：哲学概論 [2/1] ○田邊：論理学認識論 [2/1]（形式論理学上の諸問題）	①安倍：哲学演習 [2/1] 用書：Spinoza, Ethica（第一、二、三章） ②宮本：哲学演習 [2/1] 用書：Kant, Kritik der reinen Vernunft (Die transzendente Logik より)	②宮本：哲学特殊講義 [2/1]（フツセルの純粹論理学及現象学） ○田邊：哲学特殊講義 [2/1]（精神現象に関するブレンタノーの所論）
1929	①安倍：西洋哲学史概説 [4/2] ②宮本：哲学概論 [2/1] ②宮本：認識論 [2/1]（独逸学派の認識論を主として）	①安倍：哲学演習 [2/1] 用書：Kant, Kritik der praktischen Vernunft ②宮本：哲学演習 [2/1] 用書：Kant, Kritik der reinen Vernunft Vorrede より ○田邊：哲学演習 [2/1] 用書：Banch, Anfangsgründe der Philosophie	○田邊：哲学特殊講義 [2/1]（感覚と思惟）
1930	①安倍：西洋哲学史概説 [3/1] ②宮本：哲学概論 [2/1]	①安倍：哲学演習 [2/1] 用書：Kant, Kritik der Praktischen Vernunft ②宮本：哲学演習 [2/1] 用書：Husserl, Ideen Zu einer reinen Phänomenologie und Phänomenologischen Philosophie Bd.I	①安倍：哲学特殊講義 [2/1]（カント以後ノ哲学） ②宮本：哲学特殊講義 [2/1]（特ニ Realitätsproblem）

1931	①安倍：西洋哲学史概説 (近世哲学史カントまで) ②宮本：哲学概論 ②宮本：論理学認識論 (認識論)	①安倍：哲学演習 Kant,Kritik der Urteilstkraft (Kritik der teleologischen Urteilstkraft) ②宮本：哲学演習 (前年度ノ続キ) ②宮本：哲学演習 Husserl, Ideen usw[等]	①安倍：哲学特殊講義 (独逸觀念論の哲学)
1932	①安倍：西洋哲学史概説 (第十九世紀以後) ②宮本：哲学概論 ○田邊：論理学認識論	①安倍：哲学演習 Hegel, Phänomenologie des Geistes ②宮本：哲学演習 Heidegger, Sein und Zeit	①安倍：哲学特殊講義 (独逸觀念論の哲学) ②宮本：哲学特殊講義 (現代哲学の諸問題)
1933	①安倍：西洋哲学史概説 (自古代至現代) [3/1] ②宮本：論理学認識論 [4/1] ○田邊：哲学概論 [2/1]	②宮本：哲学演習 [2/1] Heidegger, Sein und Zeit (前年度ノ続キ) ○田邊：哲学演習 [2/1] GeyselJoseph Geysler], Einige Hauptprobleme der Metaphysik	①安倍：哲学特殊講義 (独逸觀念論の哲学) (前年度ノ続キ) [2/1]
1934	①安倍：西洋哲学史概説 (近世) [3/1] ②宮本：哲学概論 [2/1] ○田邊：論理学認識論 (一般論理学) [2/1] ○田邊：西洋哲学史概説 (古代中世哲学史) [2/1]	①安倍：哲学演習 [2/1] Kant, Prolegomena zu einer künftigen Metaphysik (レクラム本) ②宮本：哲学演習 [2/1] Jaspers, Philosophie Bd.II (Existenzerhellung)	②宮本：哲学特殊講義 (哲学ノ諸問題) [2/1]

<p>1935</p>	<p>②宮本：哲学概論 ②宮本：哲学演習 [2/1] ①安倍：ヘーゲルの哲学 Jaspers, Philosophie II.Bd. [副題に Existenzhellung とある哲学第2巻] ②宮本：論理学認識論 ①安倍：哲学演習 Heidegger, Kant und das Problem der Metaphysik ①安倍：西洋哲学史概説 (古代、中世) ○田邊：西洋近世哲学史概説 (近世)</p>
<p>1936</p>	<p>②宮本：哲学概論 ②宮本：演習 ②宮本：歴史的認識 Hegel, Phänomenologie des Geistes ①安倍：西洋哲学史概説 (近世) ①安倍：演習 ①安倍：ヘーゲルの哲学 Heidegger, Kant und das Problem der Metaphysik ○田邊：一般論理学 ○田邊：演習 Dilthey, Der Aufbau der geschichtlichen Welt in den Geisteswissenschaften</p>
<p>1937</p>	<p>②宮本：哲学概論 ②宮本：演習 ②宮本：哲学の諸問題 Hegel, Phänomenologie des Geistes ①安倍：西洋哲学史概説 (古代、中世) ①安倍：演習 Descartes, Discourse on Method translated by Veitch ○田邊：認識論 (主として明証の問題) ○田邊：演習 Husserl, Vorlesungen zur Phänomenologie des inneren Zeitbewusstseins</p>
<p>1938</p>	<p>②宮本：哲学概論 ②宮本：演習 Hegel, Phänomenologie des Geistes ①安倍：西洋哲学史概説 ①安倍：演習 Leibniz, Kleinere philosophische Schriften ○田邊：認識論 (主として概念論) ○田邊：演習 Hume, Treatise of Human Nature</p>

1939	<p>②宮本：哲学概論</p> <p>○田邊：古代中世哲学史</p>	<p>②宮本：演習 Hegel, Phänomenologie des Geistes (前学年の続き)</p> <p>①安倍：演習 Aristoteles, Metaphysics [E. Rolfes の翻訳版]</p> <p>○田邊：演習 Hume, Treatise concerning Human Understanding</p>	<p>①安倍：現代の哲学</p>
1940	<p>②宮本：哲学概論</p> <p>②宮本：認識論</p> <p>①安倍：西洋哲学史概説 (近世)</p>	<p>②宮本：哲学演習 Kant, Kritik der reinen Vernunft</p> <p>①安倍：哲学演習 Aristoteles, Metaphysics [Rolfes の翻訳版]</p> <p>○田邊：哲学演習 Brentano, Versuch über die Erkenntnis</p>	<p>①安倍：現代の哲学</p> <p>○田邊：形式と内容</p>
1941	<p>②宮本：哲学概論</p> <p>① [1940.10.23 ~] 田邊：論理学</p>	<p>②宮本：哲学演習 Kant, Kritik der reinen Vernunft</p> <p>①田邊：哲学演習 Brentano, Versuch über die Erkenntnis</p>	<p>②宮本：独逸観念論の哲学 (カントよりヘーゲルまで)</p> <p>①田邊：アウグスティヌスの哲学</p>
1942	<p>②宮本：哲学概論</p> <p>①田邊：中世哲学史</p> <p>①田邊重三：論理学</p>	<p>①田邊重三：哲学演習 Descartes, Meditationes</p> <p>②宮本和吉：哲学演習 Kant, Kritik der reinen Vernunft (前学年ノ続き)</p>	<p>①田邊：哲学特殊講義 (アウグスティヌスの哲学)</p> <p>②宮本：哲学特殊講義 (独逸観念論の哲学・カントよりヘーゲルまで)</p>
1943	<p>①田邊重三：中世哲学史</p> <p>②宮本和吉：近世哲学史 (独逸観念論の哲学)</p> <p>②宮本和吉：哲学概論</p> <p>①田邊重三：論理学史</p>	<p>①田邊重三：哲学演習</p> <p>②宮本和吉：哲学演習 (前学期ノ続き) Kant, Kritik der reinen Vernunft (Dietranszendente Dialektik)</p>	

<p>1943.10 ～1944.9</p>	<p>①田邊：西洋古代哲学史 ②宮本和吉：哲学演習 ②宮本：哲学ノ諸問題 Aristoteles, Metaphysik</p> <p>①田邊重三：哲学演習 ①田邊：感性、悟性、理性 Heidegger, Sein und Zeit</p>
<p>注① 担任教授名前の前の数字①は第一講座を、②は第二講座を、○は助教授を示す。 注② 1927年度は不明 注③ [/]の数字は[週時数 / 単位]を示し、明示有無は原史料による。数字以外の[]は筆者による補充である。 注④ 「1943.10～1944.9」は『学叢』第2号(1943年12月刊行)を参照した。 出典：『学界彙報』『東亜の光』1926年9月；『彙報』『文教の朝鮮』1931年5月；『哲学年鑑』第一輯(1942年)；同第二輯(1943年)；『雜録』『哲学雑誌』1928年～1942年刊行分(1942年10月開講分一部学校のみ)</p>	

3章 「哲学、哲学史」講座の教授たち

本章では、前章で若干言及した「哲学、哲学史」講座を担当した3人の教員——安倍能成、宮本和吉、田邊重三について述べる。先行研究および以前論じたことのある内容については注に譲りながら重複を避け、「哲学研究室」の学生や、当時の新聞などに掲載された評価を中心に紹介することにした。

(表3)で示したように、1926年に「哲学、哲学史」講座が設置されたのち²⁹⁾、1927年には第一と第二講座に増設される³⁰⁾。法文学部における講座設置の経緯と教員のリクルート、そして経歴上の特徴については先行研究によって指摘されている³¹⁾。法文学部の教員全員が日本人であり、ほとんどが東京帝大出身であった。そのなかで哲学科では、「宗教学宗教史」講座担任の赤松智城(1886～1960年)が1910年7月に宗教学専修で京都帝大の哲学科を卒業しているほかは、全員が東京帝大を卒業している。「哲学、哲学史」講座でいえば、1926年4月に講座担任に赴任した安倍能成(1883～1966年)と1927年6月から第二講座に赴任した宮本和吉(1883～1972年)が1907年7月に「哲学、哲学史専攻」で、1927年より講師に赴任し

た田邊重三が1919年7月に「哲学専修」で東京帝大哲学科を卒業した。この3人の京城帝大における赴任および退任に関する主な事項をまとめると以下である³²⁾。

①**安倍能成**（以下、傍線は筆者による）

- 1926年4月1日 任 教授 叙高等官四等 法文学部勤務 哲学、哲学史講座担任ヲ命ス
法文学部長事務取扱ヲ命ス
- 1926年10月9日 評議員ヲ命ス
- 1927年6月2日 哲学、哲学史講座担任を免シ哲学、哲学史第一講座担任ヲ命ス
- 1927年10月19日 視学委員ヲ囑託ス（総督府）
- 1928年9月11日 補法文学部長
- 1930年9月11日 依頼免京城帝国大学法文学部長
- 1932年3月31日 倫理学第一講座兼担ヲ命ス
- 1940年9月4日 任第一高等学校長 叙高等官一等

②**宮本和吉**

- 1927年4月5日 新潟高等学校教授 従五位 宮本和吉 任教授
叙高等官三等 法文学部勤務 哲学、哲学史ノ研究ニ従事スヘシ
- 1927年6月2日 哲学、哲学史第二講座担任ヲ命ス
- 1937年8月31日 補法文学部長
- 1939年8月31日 免京城帝国大学法文学部長
- 1944年3月31日 依頼免本官³³⁾（定年）
- 1944年11月18日 帝国大学令第13条ニ依り勅旨ヲ以テ京城帝国大学名誉教授ノ名称ヲ受ク³⁴⁾

③田邊重三

- 1927年7月1日 法文学部講師ヲ嘱託ス
 1927年10月5日 講師ヲ解ク
 任助教授 叙高等官六等 法文学部勤務（内閣及総督府）
 1930年2月13日 在外研究員発着 在外研究ヲ命セラレタル…
 1940年10月23日 助教授田邊重三 哲学、哲学史第一講座担任ヲ命ス（朝鮮総督府）
 1941年4月28日 任教授 叙高等官二等
 1945年6月30日 陞高等官一等³⁵⁾

以上の任免事項に、略歴を簡単につけ加えておく。安倍能成は1883年、愛媛県の松山に生まれ、松山中学校を経て第一高等学校に入学、在学中、野上豊一郎、小宮豊隆、藤村操、岩波茂雄らと親交を結んだ。後で取り上げる宮本とは安倍の一高時期の同級生で、安倍が学年試験に落第し（2年生をやり直した）、新しい3年生になった時に初めて知り合い、最も親しかったと回想している³⁶⁾。東京帝大の時期には夏目漱石の周りに形成されていた文芸同好人たちとも交流し、東京帝大のケーベル教授をとくに尊敬していたことが知られる³⁷⁾。友達であった岩波の書店経営に加わり、哲学叢書の編集を担当する一方、この時期より日蓮宗大学（現在の立正大学）、慶應義塾大学（予科および大学）、私立女子英学塾、一高、法政大学などでドイツ語、倫理学、西洋哲学概論、西洋哲学史などを教えた。京城帝大では1926年に当講座に赴任してから1940年に第一高等学校校長に任命されるまで、「哲学、哲学史」第一講座を担当した。戦後履歴については以前論じた内容そして先行研究に譲る³⁸⁾。

一方で、第二講座担任として1927年に京城帝大に赴任した宮本和吉は、1883年に山形県東田川郡に生まれた。1901年に県立荘内中学校（1920年

に鶴岡中学校へ)を卒業し、同年4月より山形県飽海郡松嶺小学校で代用教員を務めた。その後、1903年に安倍より一年遅く一高に入学したので、落第した安倍と同級生になったわけで、東京帝大も同じ年である1906年に入学し、卒業年度も二人は同年であった。その後、1909年に「カント批判哲学の起源」をテーマに同校大学院に進学し、当時、文科大学の講師を務めていた波多野精一と学問的に親交を結んだ。波多野とはオイケン(Rudolf Christoph Eucken, 1846~1926年)の『新理想主義の哲学』(1913年)、カントの『実践理性批判』(1918年)を共訳している。安倍と同様、岩波の哲学叢書では『哲学概論』を1916年に出版、岩波哲学辞典(1922年)編纂にも加わった。1912年、東京農業大学での英語講師をはじめ³⁹⁾、1917年には天台宗大学の「哲学史及哲学概論」担任、1918年には東洋大学の「認識論及論理学」担任を経て、1920年7月、新潟高等学校に移り(同年12月に教授へ昇進)、官立学校の教授という地位で1924年より1925年10月まで主にドイツを留学した。その後、安倍の力を得て京城帝大に移り、1944年まで17年間「哲学、哲学史」第二講座担任として勤務する⁴⁰⁾。なお、戦後の履歴については、通堂あゆみの前掲文章(注39)を参照されたい。

最後に、1927年に京城帝大法文学部の講師として赴任し、安倍の後任で「哲学、哲学史」第一講座を担当した田邊重三は、1905年に大分県で生まれた。大分県宇佐中学校、第一高を経て1919年に東京帝大を卒業する。慶應義塾大学予科、日蓮宗大学、東京高等師範学校、東洋大学、法政大学で講師や教授を務めたのちに京城帝大に赴任する。1927年には助教授に昇進し、第一講座の方では1940年から敗戦時まで担任を勤めた。その間彼が成した研究業績については注45を参照されたい。敗戦当時のポストは不明であるが、1945年6月に昇進に関する条項が確認される。

植民地朝鮮で西洋哲学を教えた西洋哲学研究者という観点から以上の3人を論じたものは皆無に近い。安倍に関しては、敗戦直後に学習院大学の復興に努め、文部大臣に任じられた教育者として「なかなか有名人」であり⁴¹⁾、

植民地朝鮮での経験について書いている文章も多いため、研究も比較的が多いが、宮本と田邊に関しては、その植民地時代について窺い知ることのできる資料がほとんどない⁴²⁾。ただ、彼らが京城でおこなった西洋哲学に関する仕事が戦後の研究にどのように繋がっているのかを表面的に指摘することは可能であろう。

とくに田邊の場合、他の二人より10歳以上若かったこともあり、京城帝大が廃止されてから1946年4月には九州大学に移り⁴³⁾、西洋哲学を教えていた。また、1959年に同大学を定年退職した直後には聖心女子大学の哲学科に移り、1975年に亡くなるまで専任であった⁴⁴⁾。彼が戦後に残した論文を見ると、京城帝大で示していた研究動向が反映されていることに気づく。たとえば、フッサール(1859~1938年)の現象学に対する持続的な関心、そして、フッサールの思想的背景を知るために研究に着手したと思われるブレンターノ(1838~1917年)とヒュームに対する関心は、京城帝大における演習講義の題目(表3を参照)をみれば明らかであり、それは1953年に発表された論文にも反映されている⁴⁵⁾。聖心女子大学に勤務していた細井雄介氏は、田邊の蔵書からブレンターノの特殊講義を単行本にした本を発見し⁴⁶⁾ 翻訳を出しているが⁴⁷⁾、その翻訳論考において、田邊が京城帝大の時期に書き上げた論文「固体の認識」(1940年)の「終結部にブレンターノの姿が輝いていた」と指摘する⁴⁸⁾。だが、田邊の現象学に関する研究が戦前と戦後にどのような連続性を持っているかを思想的に論証することは筆者の能力を越えているので、以上の指摘にとどめておく。以下では、「哲学、哲学史」講座の3人に関する学生側の記録を探り、植民地朝鮮における西洋哲学講義の一断面を描写しておくことにする。

まず、第一回の卒業生を出した1929年度の会報では次のような記述がみられる。

法文学部長安倍能成教授の西洋哲学史の講義には、哲学科以外の学生

も出るほど、評判の高いものである。先生の平常の講義振と等しく、先生の御講演は聴衆を魅了せずには置かない先生の諧謔に富んだ座談は実に相手をホロリとさせるものがあるさうだ。世相に対する先生の御批判は、私達の視野を広くし、私達の進むべき道しるべとなる。先生の平常の言葉は自ら美しい感じのよいエピグラムとなつて、私達の記憶に永く残っている。それは先生が哲学者であると共に芸術家であるからであらう。

宮本教授の四年度〔1929年〕の講義題目は、哲学概論、認識論であつた。その哲学概論は、文学科学生には実に鬼門である。コーヘン、リッケルト、フッサール等の高遠な学説が、解つて、私達は精神的に利益を得るに反して、肉体的には一つの犠牲を払はなければならない。即ち手が非常に痛いことを承知しなければならない。この概論の講義には、一回も脱線したことがないので有名だ。謹厳そのもののやうな先生が学生時代には、スポーツマンとしてご活躍になつたと言つても、諸君は本当た〔「に」の誤りか。原文のママ〕しないだらう。

田邊教授は「感覚と思惟」〔1929年度の哲学特殊講義の題目—(表3)を参照〕を置土産に歐洲に行かれる筈⁴⁹⁾。

一葉の紹介文ではあるが、「哲学、哲学史」講座の雰囲気を彷彿とさせる。関連して安倍は「私は大体哲学史の方を講じ、宮本が哲学概論の方をやつて居り、当時東京京都の両大学でもフッサールの現象学が、新カント派流行に代らうとする時期であつた。宮本は、リッケルトの居たハイデルベルヒに居た末、フッサールの居たフライブルヒに留学して居たが、京城大学でも大分フッサールの哲学を講義して居たらしい」と書き残している⁵⁰⁾。もう一点だけ付け加えておくと、ここで安倍は京城でも「内地」に劣らずフッサールの現象学が流行しつつあつたといっているが、宮本の講義の「内地に劣らない」明晰さについては当時からすでに知られていた。たとえば「予科の紅露⁵¹⁾氏

が『日本中にこんな名講義はない』と云つたのも⁵²⁾、1933年度卒業生、朴鍾鴻が「大学きつての名講義として専らの評判であつた」といったのも⁵³⁾ 彼に対する評価だったのであり、当時の雑誌の紙面も「城大唯一の名講義と称して差支へない」と伝える⁵⁴⁾。また、上の引用文では、安倍の講義を「哲学科以外の学生も出るほど、評判の高いもの」といっているが、この評価とは違って、それが「低調な講義」であり、「宮本和吉教授の講義の明快さには較ぶべくもなかつたらしい」と書き残している医学部の学生もいた⁵⁵⁾。評価はあくまで主観的なものなので、当時の雰囲気が見える一例として挙げておく。

一方で、上記した任命事項によれば、田邊は1930年2月13日に「在外研究員」として京城を発っている。彼に関する短い略歴にも「昭和5年2月哲学哲学史研究のため独、仏、英、米留学、同7年4月帰任」と書いてあることから⁵⁶⁾、田邊が2年間不在だったことがわかる。この時期に学生が残している研究室の様子があり、以下で紹介しておく。

本研究室〔哲学研究室〕には田邊重三助教授が居られることになつてゐるが未だ留学からお帰りになつていない。今ドイツにおられると。お宅の方でも三四ヶ月も詳しい頼りがいがないので何時おかえりになるか、三月か四月か分らないと云ふ。先生は『私は鳥にでもなつて大いに歌ひたい』と云はれる位俗念のない真摯な哲学者である故、先生がおかえりになつたらその新知識は蓋し我々を驚かすに充分であらう。然し先生が何をアチ〔原文のママ〕で御研究になつておられるかは知らない。⁵⁷⁾

田邊は京城帝大の「哲学、哲学史」講座に最も長い期間務めた人であっただけに、彼が京城で送った日々がどのようなものだったのか、やはり気になるが、それについて窺い知る資料は今のところない。

4章 「哲学、哲学史」講座の日本人学生

まず、「哲学、哲学史」を専攻した日本人の学生数が哲学科全体のうち、どの程度を占めていたのかを確認しておきたい。

『一覽』は1942年度分までその刊行が確認されており、卒業生の専攻が確認できるのは、1941年3月の卒業生までである。ただし、その後の卒業生においても『学叢』や先行研究によって専攻がわかる場合は統計に含めた。一方、(表4)の「専攻確認不可」は、選科生として入学が確認されるものの、卒業したかどうかの確認ができなかったケース、そして、哲学科に入学したことは確認できるが卒業の確認ができないケースである。専攻名称の変更もみられ、「哲学、哲学史」は1935年の法文学部規定改定の際に「哲学」に変更した。

(表4) 本籍別専攻別分布様相

卒業専攻	朝鮮	日本	合計
哲学、哲学史	30	9	39
支那哲学	7	7	14
倫理学	7	8	15
心理学	7	4	11
宗教学、宗教史	1	4	5
美学、美術史	1	1	2
教育学、教育史	9	8	17
社会学 ⁵⁸⁾	3	1	4
専攻確認不可	2	15	17
合計	67	57	124

(表4)において、専攻別学生数が格段に多いのは、朝鮮内に本籍地をもつ学生(以下、「朝鮮人」と称す)の「哲学、哲学史」専攻者である。また、本科を卒業したかどうかの確認ができない学生数を除けば哲学科を卒業した

学生数は、朝鮮人が65名、日本人が42名で、朝鮮人の方が日本人の学生数より多い。このような例は、京城帝大の全学科のなかで哲学科しかなかった。たとえば、予科修了者を対象に調査した他の文学部の学生数と比較してみると、史学科の卒業生は日本人が44名、朝鮮人が25名、文学科の卒業生は日本人114名、朝鮮人63名であった⁵⁹⁾。

「哲学、哲学史」を専攻した朝鮮人の学生数が格段に多いこと、そして全体的に朝鮮人の学生数が日本人を超える学科は哲学科しかなかったという統計の結果から、次の2点を指摘しておきたい。まず、哲学科の専攻数が学内で最も多かったことを勘案すると、哲学科は、日本人の学生数が最も少ないほど不人気だったということである。京城帝大の哲学科は当時から「教授の質から言っても或は講座及び研究室の設備から見ても城大創立当時の金看板とまで言はれていた位で、城大内の勢力は勿論哲学科に集まっていたと言っても差し支へない」と評価されていた⁶⁰⁾。しかし、評判と違って実際の志望率は最も低いほど不人気だったのである。二つ目は、それにも関わらず、就職と直結しない不人気な学科を朝鮮人は歓迎したという点である。関連して以下のような記録がみられる。

京城は我が大学の存在する前に、既にその近代的文明の諸施設を誇っていた。美しい壮大な多数のビンディング、完備されたモダン・ベヴメントはその美を見せびらかしたのであつた。然しながら、南大門通を自由に馳駆する自動車の猛烈な黄塵の一斉射撃を、私達歩行者が浴びる様に、私達京城市民のその時の精神生活は、あまりいい空気は吸ふていなかつたのである。精神的に砂漠であつたと云つても過言ではない。成程私達はノートリアスな役人や商人は持つていた。然し、私達は詩人や哲学者の言葉に接することが出来なかつた。然るに、我が大学には、詩人や哲学者が雲集し、彼等の下には許多の青年法人、少壮哲学徒が詩想に思索に耽つていたのである⁶¹⁾。

京城帝大に文科系の学科が設置されることによって「朝鮮の内的生活に於ける一大炬火」が到来したというのである。この会報が出された1930年の前後時期は、とくに文科系学士の就職難が酷い時期であった。法文学部が第1回の卒業生を出した1929年、『朝鮮朝日』は連日で「新学士サンは何処へ行つたらうか」という記事を掲げ、「ナイヤガラ瀑布のやうに物凄い「就職難」の中を切り抜けて」それでも「新学士」たちは良い成績をみせたと記す⁶²⁾。上記の会報でも、「就職と云ふ気味の悪い怪物が(予科の)文科Bの生徒達の頭野中を徘徊したと見えて、彼等は哲学科よりも文学科、史学科を志願している」という⁶³⁾。しかし、そのなかでも「就職のことを度外視して入つた」、「熱心な真理の探求者」といわれた哲学科の入学生がいたのであり、その数は、京城の「精神生活」に期待を寄せた朝鮮人の方が多かった。

このような状況のなかで、「哲学、哲学史」を専攻した日本人学生に9名が確認される。そのリストを以下で挙げてみよう。

京城帝大の「哲学、哲学史」を専攻した日本人学生の傾向としてまず指摘できるのは、ほぼ全員が「在朝日本人」⁶⁴⁾だったということである。津田剛を除く全員が朝鮮の中学校を卒業しており、「内地」で中学校を出た津田の場合も、彼の実兄に頼って朝鮮に渡っている。実は、哲学科全体を通じて在朝日本人の比率は高かった。出身中学校が判明できる日本人学生のなかで、朝鮮所在の中学校を卒業している日本人の数は31名、「内地」の中学校を卒業した学生数は19名である(表6)。

(表5) 1929～1945年京城帝国大学「哲学、哲学史」専攻の日本人学生

予科終了	本科入 学年度	名前	本籍	出身校	本科卒業	卒業 専攻	主な履歴およびその他	卒業論文
1928.3.	1928	津田 圃	三重	東京私立錦城中学校	1932.3.	哲学 哲学 史	1932年当時京城に居住しながら国柱会で活動。1942年～国民総力朝鮮聯盟事務局宣伝部長、1945年4月～8月京城帝大予科教授、1946～1950年3月別府女子専門学校講師・教授、1950年4月～1952年8月別府女子大学教授、1952年9月～1971年3月宮崎大学教授、1971年4月～福岡大学教授(永島広紀「戦時期朝鮮における新体制と京城帝国大学」ゆまに書房、2011年を参照)	「知るもの」と「知られるもの」との関係の一考察
1929.3.	1929	生瀧 郵	京都	京城中	1932.3.	哲学 哲学 史	仁川小学校を卒業(『仁川府史』1933年) 1932年当時岡山県金光教理講習所(『学友会会報』1932年) 1933年12月に仁川寺町に居住し金光教の布教届けを提出(『官報』2154号) 1934年当時法文学部助手(『職員録』1934年度) 1935年11月～1938年4月金光教教義講習所講師(『金光教学院沿革史』1956年) 1939年当時『金光教青年』に父萬壽より「戦線便り」が紹介されている 1942年当時海軍少佐 1954年当時、岡山県立図書館司書(『金光教図書館報・土』31号、1954年3月) (1960)福岡県会津若松市在住、県立喜多方高校勤務	純粹自我の本質関係に就いて

予科終了	本科入 学年度	名前	本籍	出身校	本科卒業	卒業 専攻	主な履歴およびその他	卒業論文
選科 29 入		習田 謙夫	京都	京北中	(選科修 1933)	哲学 哲学 史	1934～1935 年法文学部助手 (美学研究室)、1936 年 3 月 31 日～京城業学専門学校教授、1944 年 8 月 22 日神宮皇學館大学予科講師、1942 年九州帝大法文学 部倫理学科卒業、1950～1969 年 3 月九州大教授、 1969 年～福岡大教授	カントに於け る実践の意味 に就て(『哲学 雑誌』542 号、 114 頁)
1931.3.	1931	井上 雄男	愛知	京城中	1934.3.	哲学 哲学 史	1937～1939 年京城帝大附属図書館嘱託 (『職員録』) 1938 年当時『大陸通信社』(京城府黄金町所在、1920 年創刊)社長 (『新聞総覧』『治安状況』) 1950 年当時岐阜県立加納高等学校教諭 (『日本科学者 総覧』1952 年) (1960) 空欄	
1932.3.	1932	有賀 夫	長野	釜山中	1935.3.	哲学 哲学 史	1937 年 5 月当時「超越の問題」をテーマに京城帝大 大学院在学 1938～1939 年京城帝大法文学部助手 (『職員録』) (1960) 日本大学経済学部；関連して 1951 年当時日 本大学法文学部助教授	
1933.3.	1933	金柱 一	富山	龍山中	1936.3.	哲学 哲学 史	文学科 1938 年卒 (卒業論文：「平家物語に於ける文 学性構成諸要素の探求」) 1941 年 6 月当時「実存哲学」をテーマに京城帝大 大学院在学	
1933.3.	1933	生沼 豊	京都	京城中	1936.3.	哲学 哲学 史	(1960) 東京在住	

予科終了	本科入 学年度	名前	本籍	出身校	本科卒業	卒業 専攻	主な履歴およびその他	卒業論文
1929.3.	1936	神中巖 山口	山口	龍山中	1938.3.	哲学	法学科 1932 年卒。 1938 年当時羅南高等女学校教諭 1939～1941 年会寧商業学校教諭 1942 年当時新義州東中学校教諭；関連して『學叢』 にも 1943 年同校勤務とあり 1954 年当時柳井高等学校教諭を退職 (1960) 山口県柳井町在住 1961 年当時山口県官立高森学校講師 1963 年当時山口県立宇部商業高校勤務	
甲 1938.3.	1938	小野藤 香川	香川	京城中	1941.12.	哲学	(1960) 西宮市在住 1962 年当時神戸新聞論説委員室勤務；関連して 1962 年 3 月より 6 月まで日本新聞協会の第二次海外派遣団 に加わり欧米派遣	ハイデッガー に於ける Sorge の問題

① 出典：『京城帝国大学一覧』各号；『京城帝国大学予科一覧』各号；京城帝国大学校友会『会報』1932 年度，25～30 頁；朝鮮総督府『官報』；京城帝国大学庶務課『学報』各号；韓国歴史情報統合システム (<http://www.koreanhistory.or.kr/>)、最終閲覧日：2023 年 9 月 1 日)

② 参考：通堂あゆみ「「選科」学生の受け入れからみる京城帝国大学法文学部の傍系的入学」『お茶の水中学』60，2016 年；李忠雨・崔鍾庫『다시 보는 경성제국대학』후은사상，2013 年；鄭根植他 5『식민권력과 근대식학：경성제국대학연구』ソウル大学出版文化院，2011 年；永島広紀『戦時期朝鮮における新体制と京城帝国大学』ゆまに書房，2011 年。

③ (1960) = 『会員名簿』（京城帝国大学同窓会，1960）、(1994) = 『名簿』（京城帝国大学同窓会，1994）。なお 1943 年 5 月の法文学部規定改定により 1943 年 10 月以後の入学生は文学部へ統合された。

(表6) 出身中学校が判明できる哲学科日本人学生の数

本科卒業年度	中学校の所在地		
	日本	朝鮮	その他
1929	1		
1930	2	(3)	
1931		2	
1932	2	4	
1933	3 (1)	1	
1934		3	
1935	1	1	
1936	2	3	
1937			
1938		4	
1939			
1940			1 (大連一中)
1941.3		1	
1941.12		2	
1942.9	1		
1943.9			
1944.9	7	7	

注) () の数字は卒業が確認できない学生数

植民地朝鮮で中学校を出て京城帝大の予科では文科に進み、本科に進学した彼らであるが、なぜそこでほかならぬ西洋哲学を専攻したかは知る由もない。おそらく、特段動機といえるようなものはなかったと思われる。にもかかわらず、ここでは、以上の9名に着目し、植民地朝鮮の高等教育機関、とくに帝国大学で西洋哲学を正式に学んだ日本人が存在したことを喚起しておきたい。彼らは、いわば近代日本における西洋哲学の学制史のなかに含まれるはずであるが、後述するように、その情報はほとんど何も残されていない

い。一方、哲学科を卒業した朝鮮人学生の場合、大抵は韓国の「國史編纂委員會」の「韓國史データベース」や「韓國學中央研究院」の「韓國學資料統合プラットフォーム」で検索すれば何らかの情報が出てくる。そのなかには、調査をするまでもなく知識人として人口に膾炙する人物も多くいる⁶⁵⁾。それに比べると、日本人卒業生に関する情報の少なさとのギャップはさらに大きく感じられる。なるほど、植民地朝鮮からみれば、今までは「砂漠」と変わらなかった京城に、「精神生活」を可能にした誇らしい唯一の帝国大学であったのである。不明な部分は多いが、9人の前後履歴を探ってみよう。

まず、彼らの家族がなぜ朝鮮に渡っているかを窺い知らせる例はいくつかある。たとえば、生沼逸郎の場合、京城中学校を出た後に予科に進み、そのまま本科に進んだことが把握できるほかにも、仁川府の宗教現況調査により、仁川小学校を卒業していることがわかる。「朝鮮人教化から見た宗教布教状態を見るに、……我内地仏教も既に朝鮮を昔の植民地扱ひから、改めて同じ精神に変化しつつある様である」といい、仁川における仏教系の教化活動の現況を知らせているが、そのなかで「金光教の生沼逸郎君は同じく仁川小学校の出身で京城大学を卒へ将来聖職につく可く修学修法中である」と記されていることから⁶⁶⁾、金光教との関係で朝鮮に渡ったことが推測できる。実際に卒業後の履歴をみると、「内地」と朝鮮を行き来しながら伝導活動に従事しており、戦時中には海軍として出兵したことが、金光教の機関紙によって知られる⁶⁷⁾。

生沼と同様、宗教系と関連して「哲学、哲学史」を卒業している学生に、津田剛がいる。彼の植民地朝鮮における経歴については、永島広紀の研究によって明らかになっている⁶⁸⁾。永島の研究によると、津田は、彼の実兄である津田栄が京城帝大の予科に勤めていた関係で（1924～1942年に一高へ転任）朝鮮に渡って人で、兄弟共に日蓮宗を信奉していた。実際に津田は京城帝大哲学科を卒業した直後に京城に住みながら「国柱会」の活動に関わって

おり、戦時期には緑旗連盟事務局で宣伝活動をするなど、いわゆる「内鮮一致」の啓蒙活動に努めた人である。緑旗連盟では⁶⁹⁾、雑誌『緑旗』（1936年1月～1944年12月）のみならず多くの出版活動をおこなったが、津田は『緑旗』で主筆を担当するほか、『今日の朝鮮問題講座』シリーズ⁷⁰⁾などの編集も主導した。また、専攻と関連して彼が書いた哲学書に『生活哲学概説』（三教書院、1941年）という単行本がある。この本の序文は、上記した「哲学、哲学史」第二講座担任の宮本和吉が書いているが、宮本はここで津田を以下のように紹介している。

津田君は哲学の専攻者であつて、昭和七年城大哲学科を出ている。君が在学の頃は新カント学派哲学の勢威漸く衰へ、これに対抗して起れるフッセルの現象学や、デイルタイの生の哲学が盛んに読まれた頃であり、またハイデッガーやヤスパースの実存哲学も次第に世人の注目をひきだした頃であつたので、君はこれらの西洋哲学の勉強に専念すると同時にまた、他方に於いて東洋的なる西田哲学の壮大なる組織に関心を持ち、その研究をおこたらなかつた。大学を出てから、君は他の卒業生とは異なつたコースをとり、いはゆる学究の道も、教師の道もたどらず、専ら「緑旗」の主筆として、半島文化の育成と指導とに任じ、この方面に於いて確固たる地位を占めてきたのである。⁷¹⁾

アカデミズム哲学の動向について先行研究では専ら「新カント学派の流行」と繰り返し強調されてきたが、この引用文で宮本はその衰退を述べている。また、当時、哲学科の卒業生の進路は学問——大学院への進学を指すだろう——か教師かが多かったことを仄めかす文章もみられる。津田の場合、「専ら「緑旗」連盟で活動することになるが、哲学科学生のみならず京城帝大の文科系学生の多くが教育者の道を歩んだことについては、先行研究でも多く指摘されてきた。

以上で取り上げた生沼と津田が1932年3月に哲学科を卒業した人であり、その後、1933年に選科を修了した人に習田達夫がいる。彼は非予科出身で、1929年に選科生として本科に入り、おそらく本科に入学することなく選科生として卒業論文を提出し、選科修了したものと考えられる⁷²⁾。卒業後には法文学部助手、京城薬学専門学校の教授を経て、戦時期に「内地」に戻り1942年に九州帝大の倫理学科を卒業している。1949年に新制九州大学が発足した翌年には同校の論理学講義を助教授として担当しており、定年退職まで同校に勤務しながら同校の哲学関連機関紙に論文を発表している⁷³⁾。

ほかに京城帝大の大学院に進学した人に、有賀文夫と金木主一がいる。それぞれの研究テーマも「超越の問題」と「実存哲学」として確認されるが、金木の戦後履歴については不明である。また、新聞社との関わりを持った卒業生に、1934年に卒業した井上快男と、41年に卒業した小野勝雄がいる。とくに井上は、京城にいた時期に『大陸通信社』の社長を務めていたが、戦後は高等学校教諭として確認される。同じく戦後、高等学校に勤めた卒業生に梶中健毅がいる。

ここまでが「哲学、哲学史」を専攻した日本人学生の履歴について、不足でありながら現時点で把握した内容である。

一方、上記した「哲学研究室」の活動として取り上げられるものに「哲学談話会」がある。残っている史料によると、1933年10月に始まり、月1回の程度で開かれたと推測されるこの集まりでは、朝鮮人学生たちの研究発表が多くみられるなかで、金本主一が1941年9月20日（第27回例会）に研究発表をしたことが記されている。話題は「ヤスベルスの実存哲学」であった。出席者に「宮本教授以下十名」と伝わる⁷⁴⁾。そのほかにも哲学研究室では、1941年5月17日と1942年5月9日に新入生歓迎会を開いたり、教授を招いて公開講演会を開催したりという記録を残しているが、学生たちの詳細な活動内容については不明である。

おわりに

本稿では、植民地朝鮮に建てられ、解放後の朝鮮半島に多くの知識人を生んだ、京城帝国大学の哲学科、そのなかでも当時から「純哲」と呼ばれた「哲学、哲学史」講座を取り上げ、当講座においていかなる日本人教員や日本人学生がいたのかについて整理した。また、その前提となる制度上の特徴について、「固定している学部ではない新構想」を目指した「法文学部」という体制をとりながらも、京城帝大では、「史・文・哲」学科という三科編成のもとでそれぞれの専攻枠が決められていたことを指摘した。そして、実際に「哲学、哲学史」講座でいかなるテーマの授業が行われていたかについて、題名のみではあるが、関連雑誌の彙報欄などを通して明らかにした。

一方、序文で述べたように、法文学部の教員は全員日本人だったのであり、学生も全体を通じて日本人の方が多かった。にもかかわらず、植民地の帝国大学で西洋哲学を教えることとはいかなることだったのか、そして、西洋哲学を植民地朝鮮で学んだ日本人学生とはどんな経歴を持った人たちだったのかについて、考察を試みた。開設科目や当時の評価が示しているように、安倍は主に西洋哲学史講義を行い、宮本と田邊は最新の哲学思潮に敏感に対応しながら特殊講義と演習講義を行っていた。学生側の評判から窺い知れる彼らの姿も、真面目な西洋哲学研究者というものであった。植民地の帝国大学の設立趣旨と関係なく、彼らの研究は、戦後までスムーズに繋がれるものであった。むしろ「純哲」だったからこそ、現実的なスタンスから自由ではなかっただろうか。たとえば安倍能成は、京城での15年間についてこういう。

京城帝国大学に務めた十数年は、私にとってはやはり、一番勉強や仕事のできる時でもあつた。(中略) 何といつても他国である朝鮮へ来て、日本と違った国情、人情、風俗、文化に直接して、その形式として学的な

論文よりも、思ふことを自由に表現し得る随筆風の文章を書くことが多くなつた。(中略)私の問題とする所が、自然と人間との交渉、さうしてそれを究めようとする時に、どうしても文化、道徳、宗教の根本問題に集中して居ることを感じ、この京城の十数年が自分にとってむだではなかつたことを意識し、自分を軽視することの誤れるを感じ、自分が如何なる場合にも、正直に自己の自由を守り、個性を詐はらぬと共に、自分と社会との関係を忘れて居ないことに、我ながら感心するのである⁷⁵⁾。

安倍は、「京城の十数年」を、さまざまな方面において「根本問題」化することのできた、「一番勉強や仕事のできる時でもあった」という。関連して、彼は当時から「京城はいい所だと」よくいっていたという。「何故に京城が気に入つたかと聞いてみると」安倍は、「京城はギリシヤのアテネである」と微笑したという。この記者も記しているように、京城をアテネに喩える安倍の言葉は「講義に、講演に、筆に…吹聴する常套語」であった⁷⁶⁾。現実上、植民地の大学が安倍にとってはギリシヤのアテネのように感じられるほど、安倍は真面目な西洋哲学研究者であったといえるのだろうか。

一方で、日本人学生数という側面からみると、哲学科の場合、京城帝大各学科の本籍別卒業生の比率の傾向——日本人卒業生の比率が高い——から外れる。つまり、哲学科は、日本人在学生の数が最も少ない不人気の学科だったのである。そのなかで、「哲学、哲学史」を専攻した日本人学生は管見の限り9名みられるが、なぜほかならぬ西洋哲学を専攻したかは知る由もない。また、不十分ながら、前後の経歴をみても、京城帝大の日本人学生全体にみられる傾向、すなわち、在朝日本人の比率が高いことや、卒業後教員を務めるケースが多いといった一般的に指摘されてきた傾向を再び確認することにとどまった。にもかかわらず、本稿では、植民地朝鮮の高等教育機関、とくに「外地」の帝国大学で純哲を専攻した日本人学生が存在したこと

をあらためて喚起しようとした。普遍学問といわれる西洋哲学が、日本と植民地朝鮮でそれぞれ制度化される際、「内地」と「外地」という地政学的な関係ゆえに生じる不均等といったものを、人的資源という側面から確認しなかったためである。この点に関するさらなる検証は今後の課題としたい。

注

- 1) 許智香『philosophy から「哲+學」へ』文理閣、2019年。
- 2) 小学館『日本国語大辞典』の定義。ギリシャ哲学研究者・納富信留「哲学の普遍性」(『論集』37号、東京大学哲学研究室、2018年)は、本稿の問題意識と関連して「哲学の普遍性とは何か」という問いを提起し、今日に流通している哲学の下位分類や地域間区分を反省的に問い直している。
- 3) 酒井直樹『ひきこもりの国民主義』岩波書店、2017年、xii～x iiiを参照。
- 4) 日本における哲学の学制史については、柴田隆行の一連の研究が参考になる。「日本の哲学教育史」(上、中、3編の下『井上円了センター年報、2001～2005年』)；『哲学史成立の現場』(弘文堂、1997年)。
- 5) 尹健次『朝鮮近代教育の思想と運動』東京大学出版会、1982年、2頁。なお、朝鮮半島で起こった諸学問の近代化の思想的背景については本書の序章を参照。
- 6) 本稿では『京城帝国大学一覧(以下、『一覧』)』、『京城帝国大学予科一覧(以下、『予科一覧』)』の本籍表記が日本の各地だった学生を日本人学生と称する。とくに戦時期に入ると「創氏」や「改名」によって名前からの本籍の区分ができなくなる。従って、一覧の本籍記載に従い、「日本人」と「朝鮮人」を区分した。
- 7) 周知のように、法文学部の教員は全員日本人だったのであり、学生も日本人の比率が高かった。予科入学生徒の本籍地によると、1926年から1941年まで朝鮮人の全体比率は30～40%であった(鄭根植他5『^{植民権力と近代知識}식민권력과近代지식: 경성제국대학연구』ソウル大学出版文化院、2011年、472頁)。
- 8) たとえば「京城帝国大学始業式に於ける齋藤総督告辞」(『文教の朝鮮』1926年6月号)にみられる「東洋文化朝鮮特殊の疾病藥物等の研究」など。
- 9) 講座類および講座数の変動については松田利彦「京城帝国大学の創設」(酒井哲哉・松田利彦編『帝国日本と植民地大学』ゆまに書房、2014年)が詳しい。
- 10) 「社会学」講座は、設立当初、講座としてはあったが、専攻ではなかった。
- 11) 1926年度設置当時の名称であり(「京城帝国大学各学部講座」『一覧』)、のち改正の際に講座目が変わる。一例に1935年の改定。
- 12) 「法文学部」という新構想の背景については、東北大学『東北大学五十年史』上、1960年、1005～1008頁を参照。
- 13) 学科についての明確な規定はなく、「法文学部規定」の「試験」規定(九州帝大)、「科

目標準類別」規定（東北帝大）という形で主に文学系（文学士）や法学系（法学士）を区分した。

- 14) 京城帝大は、北海道帝大と同様、予科制度を置いた。京城帝大の場合、最初は2年制で、1934年3月の「予科規定」改定により3年制に変更される。
- 15) 「京城帝国大学通則」および「京城帝国大学法文学部規定」『一覧』各号。
- 16) 1904年の大改正の際に「哲・史・文」三学科制度が試みられたが、1919年度の文学部改定の際に19学科にバラした。
- 17) 具体的には、許智香「京城帝国大学における「朝鮮儒教」の位置——東京帝大「支那」系講座との連携性を重視して」（『日本思想史研究会会報』38号、2022年）を参照されたい。
- 18) 『서울대학교 50년사』上、1996年、第1編を参照。
- 19) 1947年、ソウル大学の文理科大学では、京城帝大の法文学部および、1936年に新設された理工学部の理科学の専攻に引き継ぎ、国語国文学科、英語英文学科、独語独文学科、仏語仏文学科、中国語中文学科、言語学科、史学科、社会科学、宗教学科、哲学科、心理学科、政治学科、数学科、物理学科、化学科、地質学科、生物学科が誕生した（同上、20頁）。
- 20) 同様に、金日成総合大学への継承という問題がある。朝鮮労働党は、1946年5月25日に当大学の創設を正式に決定し、創立準備委員会を組織した。その後、1949年9月まで順次創立された機関のなかで哲学科は、「력사학부」に属する学科として形を整えた。京城帝大「哲学、哲学史」専攻卒業生の申南徹（1931年卒）は、1949年に本科の教授に任命されている。また、1949年9月1日当時、97名の学生が所属していた。金日成総合大学への継承という問題については今後の課題としたい。
- 21) 京城帝国大学学友会『会報』1932年度（1933年3月発行）、178頁。
- 22) 韓国の『교수신문』は、国内の哲学科が2011年度より2021年度まで、80個より60個に減ったと報道している（『대학에서 기초가 사라진다…「철학과」25% 줄었다…』『교수신문』2023年5月22日）。管見の限り、2023年度現在、「哲学科」を設置している韓国の大学は31個あり、人文学部の「アジア言語文化学部（哲学専攻）」「融合専攻学部（哲学専攻）」のような融合形態を含むと約40個がある。
- 23) 京城帝国大学学友会『会報』1929年度（1930年3月発行）、111頁。
- 24) 京城帝国大学法文学部『教務例規集』1936年、56～57頁。
- 25) Edmund Husserl, *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*, 1913.
- 26) 京城帝国大学学友会『会報』1931年度（1932年3月発行）、142頁。
- 27) 1905年、咸鏡南道洪原郡生まれ。咸興高等普通学校を卒業後、1924年に京城帝大予科文科B組に入学。1929年に「哲学、哲学史」専攻卒業。その後、アンダーウッド（Horace G. Underwood、元杜尤、1859～1916年）が1885年に自宅で開いた私塾か

- ら誕生した倣新学校で10年間教鞭をとったのち、1939年には東京帝大の大学院に進学した(研究テーマは「カント以後ニ於ケル独逸観念論」)。1942年に朝鮮に戻り、中央中学校、京城帝大予科、京城葉専、京畿師範学校などで教えた。解放直後から名誉教授までソウル大学校師範学校に勤めた。
- 28) 『史学会誌』(のち京城帝大史学会報、京城帝大史学会誌と名称変更)、『京城帝国大学英文学会会報』、『京城帝国大学教育学会会報』、『京城心理学彙報』などがある。京城帝大が当時刊行した資料の全貌については、通堂あゆみ作成「付録3・植民地大学文献目録・朝鮮編」(前掲『帝国日本と植民地大学』収録)を参照。
- 29) 勅令47号(1926年3月31日)「京城帝国大学各学部ニ於ケル講座ノ種類及其数左ノ如シ」により、「哲学、哲学史 一講座」が置かれる。
- 30) 勅令154号(1927年6月1日)「…講座ノ種類及其ノ数ニ関スル件中改正ノ件…」。
- 31) 前掲、鄭根植他5『식민지력과 근대식: 경성제국대학연구』第2部;前提、松田利彦「京城帝国大学の創設」『帝国日本と植民地大学』。
- 32) 京城帝国大学庶務課『京城帝国大学学報』の各号を参照。
- 33) 『朝鮮総督府官報』5154号、1944年4月12日。
- 34) 『朝鮮総督府官報』5341号、1944年11月22日。
- 35) 『朝鮮総督府官報』5523号、1945年7月30日。
- 36) 安倍能成『我が生い立ち』岩波書店、1966年、363頁。
- 37) 安倍能成「人間としてのケーベル先生」『思想』23号、1923年8月;久保勉訳、安倍能成編『ケーベル博士隨筆集』岩波書店、1928年;安倍能成「『ケーベル先生とともに』に序す」久保勉『ケーベル先生とともに』岩波書店、1951年。
- 38) 安倍能成の生涯については、愛媛県教育委員会『安倍能成——教育に情熱を注いだ硬骨のリベラリスト』(愛媛県生涯学習センター、2012年)が写真や安倍の字体などを豊富に掲載されており、前掲、安倍能成『我が生い立ち』も詳しい。なお、戦後(1945年以前の活動も込めて)の彼については角度によって様々な評価が出されている。ひとまず、オールドリベラリストとして最も早い、批判的評価に、鶴見俊輔・藤田省三・久野収「日本の保守主義——「心グループ」」(『戦後日本の思想』中央公論社、1959年収録)がある。
- 39) 通堂あゆみ「宮本和吉——誠実で生真面目な哲学者」武蔵学園百年史刊行委員会編『武蔵学園百年史』主題編、2023年、136頁。なお、宮本の個人史に関しては、教職歴と人脈、そして人柄という面において通堂あゆみの同論文(同上、135~146頁)が最も詳しい。
- 40) 宮本は安倍の妹婿であった。宮本の京城帝大の就職に安倍の力が及んだことは、安倍の日記や回顧録により窺い知れる。安倍の回顧録では「(京城帝大)哲学科は二つ講座があつて、私の外の一講座は、西田幾多郎さん及び上野直昭は、先輩の得能文氏を推薦した。(中略)私の妹婿宮本和吉が、その頃新潟湯高等学校教授として、西洋に留学し

- て帰った所で、当人も希望し、又友人（その一人は高橋里美君）なども推薦して居たりして、宮本はその時の学植に於いて得能さんに及ばないことは、西田さんの所説の通りだけれども、篤学ではあり、且年が若くて健康も好かつたので、両氏の勧告に従はず、宮本を服部さんに推薦した」と記されている（同上『我が生い立ち』549頁）。
- 41) 高田里恵子「安倍能成とは誰だったか？——彼に語らせずに彼を語る——」『人間文化研究』第16号、桃山学院大学総合研究所、2022年、67頁。
 - 42) 唯一、宮本に関しては前掲、通堂あゆみの文章に宮本の日記が紹介されている。
 - 43) 1946年4月九州大学法文学部講師、同年8月教授、哲学、哲学史第一講座担任。1953年4月九州大学大学院文学研究科指導教官、1959年に同大学を定年退職後、私立聖心女子大学教授に就任。
 - 44) 聖心女子大学編『聖心女子大学 1916～1948～1998』聖心女子大学出版、1998年10月、38頁。
 - 45) 戦後の論著に「ブレンタノにおける神の証明の問題」（『哲学年報』第14輯、1953年2月）がある。参考までに京城帝大赴任時期の著訳を記しておく。「個体の認識」（『京城帝国大学文学会論纂』第9輯・教育と哲学、1940年3月）；『知識の問題・判断論』（岩波講座哲学第10輯、1933年）；『哲学論叢 29・相等性と同一性について』（尹泰東と共訳、岩波書店、1929年 [Windelbandの論文、Über Gleichheit und Identität (1910)の翻訳]）；『カント著作集 10・イマヌエルカント論理学』（岩波書店、1929年3月 [Gottlob Benjamin Jäscheが編集した *Immanuel Kants Logik, ein Handbuch zu Vorlesungen* (1800)を翻訳したもの]）；『リッケルト歴史哲学』（大村書店、1922年 [Kuno Fischerの80回誕生日記念論文集に収録された Heinrich John Rickertの論文を翻訳したもの]）。
 - 46) 田邊の蔵書にあった本は、Franz Brentano, *Ausgewählte Fragen aus Psychologie und Ästhetik. in: Grundzüge der Ästhetik*. A. Francke Verlag, Bern 1959.（『心理学および美学の選り抜きの疑問』）。
 - 47) 細井雄介「ブレンターノの想像力考」『聖心女子大学論叢』上（134）；中（135）；下（136）、2019年12月；2020年6月；2020年12月。
 - 48) 同上、細井雄介「ブレンターノの想像力考」下、40頁。
 - 49) 前掲『会報』1929年度、111～112頁。
 - 50) 前掲、安倍能成『我が生い立ち』557頁。
 - 51) 紅露文平：京城帝大予科教授。ドイツ語担当、赴任期間：1928年3月15日～1934年3月29日。
 - 52) 前掲『会報』1931年度、143頁。
 - 53) 京城帝国大学法文学部『学叢』第3輯、1944年10月、251頁。
 - 54) 駱駝山人「城大法文学部の展望・4」、『朝鮮及満州』333号、1935年、40頁。
 - 55) 田中正四『謹呈・瘦骨先生紙屑帳』1955年 [永高広紀先生より入手]、11頁。

- 56) この略歴は、聖心女子大学の細井雄介氏が田邊の論文を集めて複製本にした際に付けたもので、作成日は不明である（聖心女子大学図書館所蔵）。聖心女子大学図書館より資料を提供していただく際に福田氏より様々な助言をいただいた。この場を借りて御礼を申し上げる。
- 57) 前掲『会報』1931年度、142頁。
- 58) 『一覽』の法文学部規定上、専攻者の受け入れは1942年度から可能になったとみられる。だが、本文で指摘したように1942年度より卒業生の専攻の確認ができない。この数字は、①石川泰三（選科1940年入学）②李相昱（『一覽』には平沼相昱、本科1942年入学）③申鐘湜（『一覽』には平山鐘湜、本科1942年入学）④鄭鍾冕（入学年度不明）であり、①石川については、京城帝国大学法文学部『学叢』第2輯、1943年12月、123頁により、②③④の学生については李忠雨・崔鍾庫『京城帝国大学 音い思想경성제국대학』植民権力と近代知識 京城帝国大学研究 푸른사상、2013年、付録より専攻を把握した。
- 59) 前掲、鄭根植他5『植民権力と近代知識 京城帝国大学研究식민권력과 근대지식: 경성제국대학연구』489～490頁。
- 60) 前掲、駱駝山人「城大法文学部の展望・4」、40頁。
- 61) 前掲『会報』1929年度、110頁。
- 62) 『大阪朝日新聞附録・朝鮮朝日』1929年5月31日、6月1日。引用は南鮮版の5月31日、1面。
- 63) 前掲『会報』1929年度、111頁。
- 64) 本稿では、咲本和子の次の文章——「在朝日本人とは、朝鮮における植民者、すなわち日本帝国主義による植民地化過程及び植民地支配下の朝鮮に在住していた日本人植民者のことをさす。日本人の朝鮮への渡航は朝鮮開港前後から始まり、その後徐々に人口が増え続け、朝鮮解放時には70万余の日本人が朝鮮に在住していた。在朝日本人は、朝鮮の在住していた植民地体験者であると言えるだろう。したがって、日本帝国主義による朝鮮支配について考察する際、在朝日本人を抜きにして考えることはできないと思われる」に含まれている定義に従い、とくに中等教育を植民地朝鮮で受けることのできた人々を、在朝日本人の2世として考慮した（咲本和子「皇民化」政策期の在朝日本人——京城女子師範学校を中心に——『国際関係学研究』25号、津田塾大学、1998年、79頁）。
- 65) 許智香『京城帝国大学 法文学部 哲学科 学生たち경성제국대학 법문학부 철학과 학생들』概念と疏通『개념과 소통』31号、2023年6月、表2-1を参照。
- 66) 仁川府庁編纂『仁川府史』1933年、1360頁。
- 67) 『金光教青年』新年号、金光教徒社、46～47頁。刊行年度不明であるが、1939年と推測される。
- 68) 永島広紀『戦時期朝鮮における「新体制」と京城帝国大学』ゆまに書房、第1章、注43が津田剛の履歴を克明に伝えており、本書第2章では、「国民総力朝鮮連盟」の宣伝部長であった津田剛が論旨の中心となっている。

- 69) 同上、第1章を参照されたい。
- 70) 『今日の朝鮮問題講座 (1)～(6)』緑旗連盟、1940年。各シリーズの筆者と題名を挙げておく。(1)津田剛『内鮮一致論の基本理念』；(2)鈴木武雄『大陸兵站基地論解説』(緑旗連盟、1939年)；(3)八木信雄「学制改革と義務教育の問題」・海田要「志願兵制度の現状と将来への展望」；(4)緑旗日本文化研究所編『朝鮮思想界概説』；(5)孫貞圭・趙圻煥・任淑宰・津田節子『現代朝鮮の生活とその改善』；(6)森田芳夫『国史と朝鮮』。
- 71) 津田剛『生活哲学概説』三教書院、1941年、1～2頁。
- 72) 京城帝大の選科制度については、通堂あゆみ「「選科」学生の受け入れからみる京城帝国大学法文学部の法系的入学」『お茶の水史学』60号、2017年を参照。通堂によれば、選科生も選科を修了するには、学部本科における卒業論文を執筆する必要があった(28～29頁)。なお、本文のように判断した理由は、習田の名前が1933年度の卒業生リストにはなく、選科修了生に彼の名前がみられたこと、そして『哲学雑誌』(542号、1932年4月)に彼の卒業論文の題名が記録されていたからである。
- 73) 「習田達夫教授業績目録」『テオリア・哲学・心理学科紀要』13号、九州大学教養部、1970年3月。
- 74) 京城帝国大学法文学部『学叢』第1輯、1943年1月、118頁。
- 75) 前掲、安倍能成『我が生い立ち』557～558頁。
- 76) 『大阪朝日新聞附録・朝鮮朝日』南鮮版、1930年1月15日。

